

いま、どんなきもち？

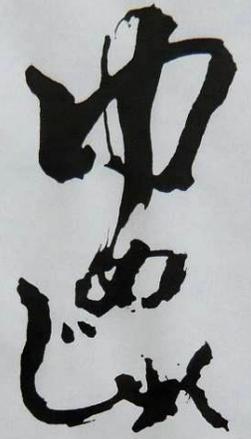
「子どもたちも考える！人権尊重について」

11月20日（火）船木小学校一年生の授業を参観させてもらった。昨年度から新居浜市では人権・同和教育の一層の推進を図るため、小・中学校の人権・同和教育の授業を市民に広く公開している。

竹組のみなさんはすでに着席しているが、チャイムにはまだ間がある。すると佐光彰子先生、「始まる前に歌でも歌おうか」と一

声、児童たちは「ハイ！」とたちあがる。姿勢正しく、胸を張って、首を振ってリズムをとりながら大きな声で歌いだす。気持ちがいい。授業は与えられた三つの場面、例えば「あそびたくて、『ねえねえ。』とともだちのかたをたたいたら、『いたい。』とおこってきた」とき、どんな気持ちになるか・・・など。その答えは先生が「なんでよ！」「どうしよう」「しょんぼり」など16通りの気持ちとその表情の絵を用意していて、その中から選ぶという段取り。

その後、班学習に移行するが先ずはルールの確認。「話すとき一相手に聞こえる大きさと、聞くとき一相手を見てうなずきながらやさしい気持ちで」と声をそろえて唱和する。誰かが発表すると自然に拍手がわきあがる。教室の雰囲気はやわらかく伸びのびして、余分な緊張感がない。一人残らず授業の中に入り込んでいる。一年生でここまでできる・・・とても、うれしくなった。



瀬戸会館だより
平成25年 1月号
新居浜市瀬戸会館
〒792-0821
新居浜市瀬戸町7-30
E-mail
seto@city.niihama.
ehime.jp
TEL 0897
41-5859
(FAX 兼用)

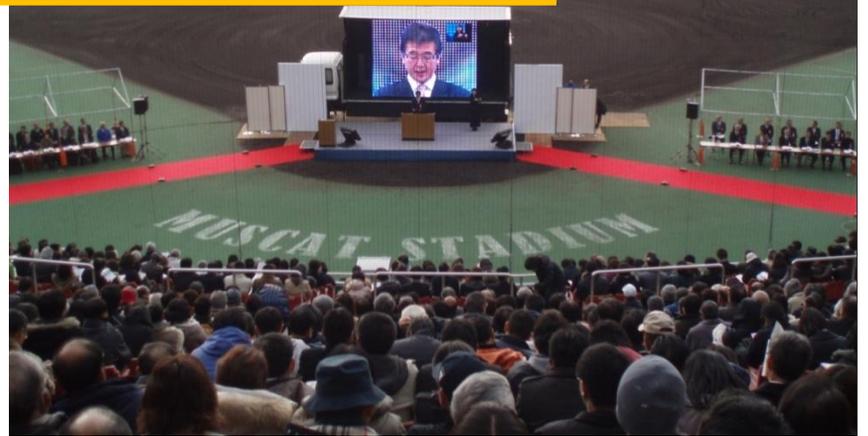
全国人権・同和教育研究大会 岡山で開く

全国水平社創立90周年にあたる今年、12月1日（土）・2日（日）の両日64回目を迎えた標記の会が倉敷市ほか岡山県の各地で行われた。地元大会テーマは『熱と光を求めて人権の学びをすべての人に』。洪染一揆やハンセン病問題に取り組み、人間の尊厳を守りぬく闘いを受け継いできた岡山で、日本各地から実践の成果が報告された。愛媛からも宇和島市の山下瞳さんと大木理恵さんが「識字学級と私～人権教育と私～」のテーマで報告した。

祖父や母が差別に立ち向かう姿を見て育った岡山県の早瀬尚子さんは、小学校教師の採用試験の面接で志望の理由に「差別をなくしたいから」と答える。そして教師になるも教育現場で出合う様々な葛藤が、全体会の特別報告で語られた。

東京の定時制高校で教える桐畑善次さんは部落問題研究会でも指導しているが「定時制高校こそが差別社会の縮図だ」と述べている。熊本の旭志中学校で教える平井靖志さんは「被差別部落の親は『胸張って』子どもに立場を伝えたい、といつも考えている。」と語り、その言葉は重い。

特別分科会では阿部ユポさんが「アイヌ民族の先住権の回復について」と題して講演。阿部さんは歴史の流れに沿って出来事を語られたが、これまで蝦夷地を征服し、現在もなおアイヌ民族を『先住民族』として認めようとしない「日本政府」の、それを支えている国民の状況は、差別撤廃を目指す者にとって避けて通ることのできない課題であると提起された。



謹賀新年



新春を迎え、幸多き年と

なりますよう祈念いたします。

今年も瀬戸会館へのご理解とご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

1月の主な行事予定

9・23日(水) — 移動図書館

11日(金) — 人権のつどい日

演題「泉川まちづくり協議会生涯学習部
会活動から」講師 新居浜市泉川まちづ
くり協議会生涯学習部会 野本敏久

17・31日(木) — 絵本・紙芝居 お
話し会 泉川小学校放課後児童クラブ



1月公演
回転木馬
おはなし会

1月9日予定
10:40~11:00
瀬戸児童館



手づくりの門松を、地域の方から頂きました。

人権あらかると

女性であるがゆえの差別（2）

臼井 敏男

1985年、ナイロビで開かれた第3回世界女性会議に愛知県の派遣団の一員として出席したのも刺激になった。「はじめは女性差別を無くそうという意識はなく、部落差別をなくすのが先と思っていました。しかし、部落のなかで、女性であるがゆえの差別がある。たとえば、読み書きが不自由な人は女性の方が多いんです。」

1985年10月、年上の部落出身の女性をくどいて部長になってもらい、女性部を作った。山崎鈴子が事務局長になった。2007年、愛知県連で部落の女性のアンケート調査をした。「いまでも大学への進学率は女性の方がかなり低い。女の子は大学に行かなくていいという雰囲気があります。大学へ行けばいいというものではないが、お母さんやお父さん、おじいちゃん、おばあちゃんも含めて意識を変えていきたい。」

もうひとつ、アンケートで気になったのは配偶者の暴力（DV）である。「DVが起きる比率は部落も部落外も同じですが、部落の女性と部落外の男性の場合、DVに部落差別が重なることがあります。部落の女性が受ける特有のDVです。」

山崎は語る。「部落差別とともに女性差別をぜひとも解決していきたい。私はここでみんなに守られ、育てられました。今はアイデンティティーもふるさととも部落ですね。」

臼井敏男『部落差別をこえて』（朝日新書）より

臼井敏男 慶應義塾大学非常勤講師

日ごと新しく！

～改修工事進む～

- ・女子トイレの増設（下写真）
 - ・廊下の天井はりかえと照明を新設（右写真）
 - ・外壁塗装の準備などとともに工事が着々と進んでおります。
- ご協力ありがとうございます。



「人権のつどい日」にひろう

12月11日（火）はDVD『『人の値うちを問う』～人権の詩人・江口いと～』を視聴した。自身だけでなく、息子、孫の三代にわたる差別を受けてきたいとさんは、視聴した教材のなかで「世間は冷たい。この冷たさがあつたればこそ、私に生きる勇気を与えてくれた」と語る。しかし、私たちはこの言葉をどう受け取ればよいか。また、息子の久さんは結婚に反対した奥さんの両親について「妻の父母に感謝している。正しいと思うことを正しいと生きていく女性に育ててくれた」と語っている。

江口いとさんのお話しを直接伺ったことのあるこの日の出席者からは「学校等で同和教育をしてきた自分にとって、いとさんの、この生き方を知ってカルチャーショックを受けるほどの力強さを感じた」「やさしさのなかに、リンとしたところが常にあった」などの意見が出された。人を責めるのではなく、人間愛で差別解消に取り組む同志の輪を広げてきた江口いとさんの願いを、私たちはどう受け継いでいけばよいか――と話し合いは続いた。



当館に隣接する「瀬戸児童館」からクリスマス会のサンタさん役のご指名を受けた。当日、参加している子どもたちは2歳児とその保護者30名。サンタさんの登場までに児童館のベテラン指導員が歌や踊り、ゲームで最高に楽しい雰囲気に盛り上げている。子どもたちのテンションも最高潮。いよいよサンタさんの出番となった。こちらも負けずに精一杯のテンションで「ハロー！児童館の「よい子」のみなさん、元気ですかー」。ドアを開けたとたん、驚きと歓喜の声。笑顔いっぱい立ちあがって手を振る子、中にはお菓子を食べていた動作がまさにストップモーション、こわばった表情で身動きしないまま母親にしがみついている子などなど。心の動きがそのまま表情に表れている。大きな袋の中にはプレゼントのお菓子。あいさつ代わりに会話をしながら一人一人に直接手渡す。「お名前は？」「ごはん、いっぱい食べてますか？」などの問いにさまざまな表情で、食い入るようにこちらの顔を見ながら、精いっぱいのお返えをしてくれる。子どもたちの素直さがこちらの気持ちまでも笑顔に変えてしまう。どの子も愛おしくなったサンタさんでした。この「純粋な心」がそのまま大きく育つように、人の心が大切にされる社会であってほしい、と念じずにはいられませんでした。